

アイアンマン

2008(平成20)年6月26日鑑賞(試写会・TOHO シネマズ梅田)

★★★



第1章

シリーズものからコミックの映画化まで

監督・製作総指揮=ジョン・ファヴロー/出演=ロバート・ダウニー JR./テレンス・ハウード/ジェフ・ブリッジス/グウィネス・パルトロー/ショーン・トゥーブ/ファラン・タヒール/レスリー・ビブ (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント 配給/2008年アメリカ映画/125分)

……週末3日間で1億ドル突破！ さすがアイアンマン。スパイダーマンと
いい勝負をしているらしい……。『マーベル・コミックもの』ながら、ヒーロー
の人間としての悩みが観客の前に赤裸々に！ また、ビル・ゲイツ発言と
同様の、若きオーナー社長のビックリ発言から生まれる、「会社は誰のもの
か？」というテーマは現代的！ こりゃ意外と面白い！ この手の映画に食
傷気味の私でもそう思ったが……。

また新作が！ 新シリーズが！

マーベル・コミックを原作とした大ヒット映画のトップは何とんでも『スパイ
ダーマン』(02年)だが、その他にも『X-MEN』(00年)、『デアデビル』(03年)、『ハ
ルク』(03年)、『ファンタスティック・フォー』(05年)など、たくさんある。アメリ
カ発のコミックが全世界を制覇していくのはあまり気分のいいことではないし、作品
の質もそれほど高いとは思わないが、最近のハリウッドの映像技術の進歩によって、
アメリカン・コミック頼み、マーベル・コミック頼みの風潮はますます高まっている
ようだ。

そんな中、新たに生まれたのが、「子供の頃からマーベル・コミックを読んでいた
けれど、アイアンマンは一度も映画化されていない最大のキャラクターだから、ワクワク
した」と語るジョン・ファヴロー監督によって、つくられた『アイアンマン』。
そして、これはきっと「新シリーズ」になるはず。なぜ、それがわかるの……？ それ
は、「エンドクレジットが終わった後も立ちあがらないで下さい」との予告を受け

て、エンドクレジット終了後に流されるあるシーンを観れば明らか。あの『パイレーツ・オブ・カリビアン ワールド・エンド』(07年)でも使われた手法だが、これによって、『アイアンマン』は「最後まで席を立つな!」が合言葉になっているというからすごい。

公開直後の興行収入は……?

プレスシートによれば、『アイアンマン』は「2008年5月2日に全米4,015館で公開され、週末3日間で興行収入1億ドル突破を記録した」とのこと。そして、「この驚異的な記録は、2008年度全米オープニング興行収入1位、さらに続編・シリーズものではない作品として、全米オープニング興行収入歴代2位を記録(因みに歴代1位は2002年公開の『スパイダーマン』)、全世界オープニング興行収入歴代3位を記録しメガヒット」とのこと。

他方、『キネマ旬報』7月上旬号の「BOX OFFICE REPORT」は、5月9日～15日について、『アイアンマン』が今週も首位の座を維持、その売り上げ6465万ドル余(週末だけでは5119万ドル余)は、昨年の『スパイダーマン3』の第2週の成績(7129万ドル弱)と比べても、ほとんど遜色のない数字である。減少率で見ると、『スパイダーマン3』の約60%マイナスに対して『アイアンマン』は50%。滑り出しの熱気が急速には失われていない展開となっている」と紹介しているからすごいもの。やはり、子供の時からマーベル・コミックに親しんできたアメリカ人には、こんな映画はピッタリで、次々と新キャラクターが登場しても胸ワクワク感はずっと続くらしい。半分そんな白けた気持で試写会に行ったのだが、意外に私もその面白さにワクワク、ドキドキ……。

こんな2代目なら……

スターク・インダストリーズ社を巨大な軍事企業に育てあげた社長は、一人息子が20歳の時に交通事故で亡くなってしまった。そうすると、その企業の跡目を継ぐのは通常その一人息子だが、創業社長の2代目はボンボンでダメなケースが多いもの。しかし、スターク・インダストリーズ社の場合はそうではなく、一人息子のトニー・スターク(ロバート・ダウニー JR.)は15歳でマサチューセッツ工科大学を卒業したという天才だった。

父親の莫大な遺産と会社の経営権を相続したスタークは、その天才的な発明能力を駆使して次々と新しい武器を開発し、受け継いだ企業をさらに発展させていた。そして彼は今、完成させたジェリコ・ミサイルを披露するため、友人でありかつ合衆国政府の軍事アドバイザーを務める空軍中佐ローディ（テレンス・ハワード）と共にアフガニスタンの地に立っていた。そんな若きリーダーの側に仕えるのは、父の友人でもあった最高幹部オバディア・ステイン（ジェフ・ブリッジス）と、すばらしく有能な美人秘書のベッパ・ポッツ（グウィネス・パルトロー）。

発明にも経営にも自信満々な彼は、もちろん女にも自信満々。したがって、プレイボーイとしても浮名を流していたが、遊びと仕事の切り替えが早いのがスタークのいいところ……。

パワードスーツ「マークⅠ」はいかにして……？

『スパイダーマン』や『バットマン』（89年）そして『アイアンマン』のようなヒーロー映画には必ず敵役が必要。この映画におけるそれは、アフガニスタンの武装過激派集団のリーダーであるラザ（ファラン・タヒール）。ラザがそんなところの過激派集団のリーダーと違うところは、彼も発明が好きらしく、新しい武器の開発に強い興味を持っていること。そのため、ジェリコ・ミサイルのキャンペーンのためアフガニスタンにやって来たスタークたちを襲い、スタークを捕虜としたラザは、スタークに対して自分たちのためにジェリコ・ミサイルをつくれと要求することに。もっとも、襲撃の際、目の前で爆弾が爆発したためスタークは瀕死の重傷を負っていたが、テロ集団に監禁されていたインセン医師（ショーン・トープ）が工夫した人工心臓によって、スタークは何とか一命を取り留めることができたのはラッキー。

アメリカでは飛ぶ鳥を落とす勢いで次々と新しい武器を開発・製造していたスタークだったが、捕虜となった彼がそこで見てショックを受けたのは、自分たちが開発・製造した武器がテロ集団の武器として使用されていること。今はこの絶体絶命のピンチをいかにして切り抜けるかで精一杯だが、この体験が後日彼の価値観や思想を大きく転換させるきっかけに。

この映画には、アイアンマン用のパワードスーツとして「マークⅠ」「マークⅡ」「マークⅢ」の3通りが登場するが、最初の「マークⅠ」はラザの捕虜とされ、強力な監視の下でジェリコ・ミサイルづくりに励む中、密かにインセン医師の協力を得て

つくったもの。そんなパワードスーツ「マーク I」はいかにして誕生したのか……？
それが、この映画前半の大きな見どころ！

スターク発言のビックリ度は、ビル・ゲイツ発言以上

マイクロソフト社の創業者であるビル・ゲイツが2008年6月27日を最後に52歳で引退し、「今後は慈善活動に専念する」と発表したのには驚いたが、これは2年前に予告していたもの。しかし、パワードスーツの威力によって何とかアメリカに帰国することができたスタークが、記者会見の場で突然述べた言葉には、私はもちろん、アメリカ中がビックリ。

それは、「スターク・インダストリーズ社は、今後一切武器の開発・製造をしない」というこれまでの路線を180度転換させるものだった。そりゃ、一体なぜ……？

会社は一体誰のもの？

この映画を観た6月26日は、最も集中する翌27日とともに株主総会の集中日。6月25日に東京での株主総会に監査役として出席した私の目では、また弁護士である私の目では、いくら代表取締役であっても、記者会見の席でいきなりこんな定款に定める「会社の目的」を無視した発言をするのは、株主無視もいいところ。

また、スターク発言は取締役会の承認を得ているものではなく、代表取締役の個人的な考え方だから、それがそのまま会社の方針になるものでないのは当然。こんな風に、「会社は俺のもの」と考えるのがオーナー社長の悪いところ。きっと最高幹部のステインはそう考えたはずだ。

したがって、映画後半は、そんなステインによるスタークへの反撃＝会社乗っ取り作戦の展開が見どころに……。

新発明はすぐにコピーが……？

「特許」の概念が弱く、何でもすぐにコピーすることによって海賊版が出回るのが中国。それはそれで困ったことだが、こと武器に関する新発明については、敵国がすぐにそれをコピーして似たような武器をつくるのは当然で、仕方のないところ。したがって、スタークが発明し、スターク・インダストリーズ社で製造した新しい武器が、そのままラザのアジトに大量に貯えられていたのは、ある意味当然。すると、スター

クが発明し、脱出用に使ったパワードスーツ「マークⅠ」についても、その残骸を砂漠の中で発見したラザが、そのコピーをつくろうとしたのは当然。さあ、それを完成させたラザは……？

「敵の敵は味方」の論理がここにも……？

「白猫であれ黒猫であれ、鼠をとるのが良い猫である」と言ったのは鄧小平だが、これはいかにも実用主義者らしい彼の性分を表したものだ。他方、文化大革命の時代（1966～77年）において紅衛兵のバイブルとなった『毛沢東語録』には「敵の敵は味方である」という毛沢東の名言があるが、これはいかにも戦略家らしい彼の本質を示す言葉。

映画の前半はほとんどスタークの一人舞台だが、スタークが武器製造中止発言をした中盤以降、がぜん存在感を増してくるのが、ステイン。したがって、スタークの敵はてっきりラザだと思っていると、それは大違い……？ 実はそうではなく、スタークの真の敵はステインなのだ！ それはなぜ……？ ステインはどんな行動をとっていたの……？

「敵の敵は味方」という格言をステインの立場から見れば、それは一体どうなるの……？ そう考えれば、おのずと答えは出てくるはずだが……？

ちょっと不自然……？ ちょっと単純……？

「最も強力な武器をつくるのが平和への一番の近道」という理屈は、ある面では正しいかもしれない。そして、映画前半のスタークはそう信じて疑わなかった。ところが、アフガニスタンでの捕虜体験によって、彼の価値観や思想は一変し、今後スターク・インダストリーズ社は武器製造をしないと宣言することになったことは前述のとおり。すると新たに彼が、またスターク・インダストリーズ社が目標としたのは一体ナニ……？ 私の目には、それがこの映画ではイマイチ不明確……？

また、スターク思想の転換が、ラザのアジトにスターク・インダストリーズ社の武器がふんだんに貯蔵されているのを見たためというのは、『チャーリー・ウィルソンズ・ウォー』（07年）において、チャーリー下院議員（トム・ハンクス）が急にムジャーヒーディーンの支援に目覚めたのと同じように、少し単純すぎるのでは……？

スタークの恋模様は？

映画前半のスタークは女に対しても自信满满だったが、後半は秘書のベッパーとの距離感や空気が少し微妙に。それも映画後半の見どころ。また、前半のスタークは正義感の強い女性ジャーナリストであるクリスティン（レスリー・ビブ）の皮肉っぽいインタビューも軽く受け流していたが、プレイボーイから熱い心を持った平和主義者に変身（？）したスタークに対して、クリスティンが少しずつ心を惹かれていったのは当然。

映画後半は、スタークのそんな人情味豊かな恋愛模様（？）にも注目！

クライマックス対決は？

前述のように、この映画を観ているとスタークの最大の敵はテロリストのラザのように思うはずだが、後半になると実はそうではないらしいということが明らかになってくるから、要注意。したがって、この評論でもこれ以上のネタばらしをすることができないのが残念だが、読者諸氏はスタークの真の敵は誰かをよく考えてもらいたい。

クライマックス対決で赤と金色に輝くパワードスーツ「マークⅢ」を着たスタークの敵となるのは、高さ3m、重さ380kgという特大サイズのアイアンモンガー。鉄の固まり同士のぶつかり合いはある意味奇妙なデスマッチだが、互いにジェット噴射をかけ、高い高い上空に達したところで一瞬に2人の決着がつくことになるが、さてそれはナゼ……？ もちろん、その伏線はあるシーンで紹介されているから、くれぐれもそんなシーンを見逃さないように。

もちろん、こんなヒーロー映画はハッピーエンドが当然の約束ゴト。したがって、途中アイアンマンをどんな危機が襲っても、また巨大なアイアンモンガーからいかに痛めつけられても心配することなく、ド派手なハリウッド型特撮による、アイアンマンとアイアンモンガーのクライマックス対決を楽しもう。

2008(平成20)年6月30日記